

國學院大學學術情報リポジトリ

報告「初年次教育における国語力養成の取り組み」

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小嶋, 知善 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00002093

【報告2】

初年次教育における国語力養成の取り組み

小嶋 知善氏（大正大学 表現学部長・教育開発推進センター長）

（司会） 続きまして、大正大学教育開発推進センター長・表現学部長の小嶋知善先生から「初年次教育における国語力養成の取り組み」と題してご報告をいただきます。小嶋先生、宜しくお願いいたします。

ご紹介に預かりました、大正大学の小嶋知善と申します。よろしくお願ひいたします。

本日、このような場で発表をさせていただくにあたって、私は、三つの失敗をしたと思っております。

まず、一つ目はタイトルです。「初年次教育」というふうに付けてしまった。これは、教養教育というものに異を唱えたわけではございません。本学では一年生を対象として、国語の力を伸ばす取り組みをやっておりますものですから、このように付けてしまいました。広い意味での教養教育の一環というふうに考えていただいて、お許し願ひしたいと思います。

二つ目は、以下にお示しするパワーポイントです。作り方が杜撰で、申し訳ございません。

三つ目の失敗は、安易にこのようなご発表をお引き受けしたということです。それが最大の失敗なのですが（会場笑）。

どうかお聞き苦しいところもあるかと存じますが、よろしくお願ひいたします。

まず、大正大学についてご存じない方もいらっしゃると思ひますので、紹介させて

いただきます【スライド2】。大正大学は、豊島区の巣鴨にほど近い西巣鴨にある仏教系の大学です。創立は大正15年。寺院の子弟養成の大学として出発しました。設立宗派は、平安仏教の天台宗と真言宗、そして鎌倉仏教の浄土宗です。真言宗は、さらに豊山派と智山派に分かれております。当初は三宗四派というふうに言っておりましたが、現在では、四宗として紹介しております。四つの宗派からなる仏教の連立総合大学であるということが特長であり、仏教精神を基調として大学運営を行っております。

建学の精神ということで申し上げます、仏教系の大学ですので「智慧と慈悲の実践」というのが建学の精神ですが、さらにそれを分かりやすく読み解いて「四つの人となる」という教育ビジョンを掲げております。「慈悲・自灯明・中道・共生」というのが、その四つです【スライド4】。

初めに少し説明させていただきますと、大正大学において教養教育部門は、本日も話する国語教育だけではありません。「学びの窓口」「学びの基礎技法」というふうには、教養教育、初年次教育部門を展開して

おります。「学びの窓口」では、文化・社会・自然・地域という四部門で学生に授業をやっていきます。

これからお話する「学びの基礎技法B」というのは国語教育中心なのですが、他に「学びの基礎技法A」というのもございまして、その科目ではキャリア教育・語学・情報教育を中心にやっております。

私の肩書きのところ「教育開発推進センター」と記してございます。これについては、國學院の教育開発推進機構の物まねみたいな名称で恥ずかしいのですが。こちらの教育開発推進機構の取り組みは6年も先行していらっしゃる、しかも大きな展開をされておられる。その機構と違って、私どものセンターはまだ一年も経っておりません。昨年4月に発足したセンターです。現在の4600人規模の大正大学。1年生に限って言えば1200人余りの学生です。この人数の学生に均質な教養教育や初年次教育をやるにはどうしたらいいかというようなことを考えて発足したのが本学の教育開発推進センターです。

ここに『大学生の文章教室』というテキストを持ってきました。これは、ほぼ十年前に、私が他の先生と一緒に作り上げたものですが、このテキストを使って大学1年生に国語教育をやっておりました。学科での専門授業をお持ちの先生方に協力していただいて、学部学科から、出来るだけ学生受けのいい先生、あるいは学生と連携しやすい先生、さらには初年次教育に理解のある先生をお願いして、専門教育の他に、学部や学科の1年生に、全学的な国語教育をやっていたのです。そのためにはテキストがなければいけない。そこで、学部や学科

を横断したような、いわゆる国語というもの基礎力を作るためのテキストを作ったわけです。

これについては、後ほど総括の所で改めてお話しいたしますが、いい点と悪い点がございまして、いい点から言えば、学科の先生方が、自分の学科の1年生を教えるということは、1年生の国語のレベルを理解しやすいわけです。それを、専門教育、例えば基礎ゼミナールというところと上手く連動させて、国語の力をアップするということができます。

悪い点を言いますと、どうしても先生方のご負担になるということです。と言いますのも、この国語の授業で、学生に文章を書いてもらって、それを添削したり、指導したりするというのは、やはりとても手間暇のかかることです。そういうことで、だんだん先生方の負担になって来たということがありました。

そこで、本学では、昨年4月に、国語教育に特化して、これを専門にやっていただける先生方、つまり「学びの専門技法B」に特化した専門の先生4人に来ていただいて、新たな取り組みを始めたのです。

そういうわけで、新たな取り組みが大学全体に認知して頂き、支援して頂く必要がありましたので、学内での報告会、それからFDを2度にわたり開催しました。それらを通じて、取り組みの浸透度合いや、学内のご要望がどの辺にあるかということなどを検証いたしました。

「学びの基礎技法B」についてさらにお話しさせていただきます。まず、科目の到達目標を掲げました【スライド6】。「基礎的語彙や漢字を身につけている」「文章読

解の方法を学び基礎読解力を身につけている」といったような、ありきたりと言えばありきたりですけれども、基本的なところを到達目標に掲げて始めたのです。特徴としましては、クラスのレベル分けをして、この授業を実施したということです。

レベル別クラス分けについては、入学式翌日の4月2日に、「プレイスメントテスト」を実施して学生の国語力を測り、それに基づきグレード別のクラス編成を行いました。プレイスメントテストについては、相当時間をかけて作りました。今年度も同じように実施して、経年変化を検証しようと思っております。

この授業について、前期・後期それぞれにどのように展開したかの一覧を掲げました【スライド7】。漢字テスト、図書館の使い方や、情報をどのように扱うかということ。それから表記のルール、話し言葉と書き言葉の違い、誤用訂正、引用の仕方、そして小論文。小論文は4回行いまして、それぞれ添削の上で返却しております。

クラスの編成はこの通りです【スライド8】。先程申し上げたプレイスメントテストに基づいて、このように31クラスに編成しております。1クラスあたり30~49人程度です。本学は現在4学部であり、平成28年度にはもう一学部増えて5学部になりますが、それでも大きな大学ではないので、このようなクラス編成を行えるのです。ただ、今後大きくなった場合には、その対応を考えねばならないでしょう。

また、学年全体の統一した成績付けを行いました【スライド9】。出席・漢字テスト・小論文などについて、評価基準と点数配分をきっちり決めて行いました。小論文につ

いても、課題を決めて4回実施することが明記してあります。

実は、本学の旧来の国語教育においては、先生によって、採点・添削のやり方が違うということがありました。それに対して、「こういうふうなやり方でやってください」とお願いするのは、なかなか言いづらいものがありました。先生によってチェックの仕方、あるいは朱の入れ方が違う。そのような弊害をなくすために、「学びの専門技法B」では、ループリックを作りました【スライド10・11】。3つの大項目にそれぞれ細かい項目を設けまして、全部で28項目の評価基準です。こう見ると細かすぎるようですけれども、句読点の位置や、あるいは文体、あるいは改行、あるいは漢字やひらがな表記が上手くいっているかというようなことについて、それぞれの評価項目をチェックした上で、学生が書いた課題の現物に添えて一緒に返却する、ということを行いました。このループリックを用いて評価を行った先生方も最初は大変だったのですが、4回目には項目にも慣れることが出来ました。

それから、これは私の経験なのですが、たとえば、ある学生の文章を真っ赤に添削して返したとします。先生が、すごく時間をかけて朱を入れて返したとしても、学生が喜ぶかどうかは微妙なところがあって、「先生、ありがとうございます」と感謝されることもあれば、少数ながら「苦勞して書いたものを真っ赤にして返された」と反応されることもあって、微妙なところなんです。けれども、このループリックを使えば、返却された学生も客観的に自分の文章が見られるのです。それから先生のほ

うも、学生の文章の、同じ間違い、同じような問題点を、いちいち何度も添削するという手間が省けるということで、一定の効果をあげたと思います。

もう一つ、お話しいたします。「学びの専門技法B」の授業にはTA（ティーチング・アシスタント）を採用したことです【スライド12】。TAの活用自体は、私どもの大学の他の授業でもあることですが、大々的にTAの方々と連携して協働で授業を運営したという点では、この「学びの基礎技法B」という科目が初めてです。TAさんは本学や他大学の大学院生・卒業生・修了生から採用しています。TAの方々は、教育の場面で活躍したいという人が大半です。そういう人達に取っては、実際に教壇に立っている先生と連携するというのが、何かしら参考になるのではないかと考えております。もっと言えば、先生方にTAさんを育ててもらいたいということでもあります。先生方にはご負担だったと思いますけれども、そのようなこともお願いして、取り組んでおります。

TAがどのような作業をするかという、たとえば授業の時に漢字テストの答案を返却したりします。また、授業に使う色々なプリントを配るなど、授業の補助を行います。漢字テストについて申せば、どういう箇所を多くの学生が間違えたか、教壇に立って説明してもらったりもする。そのようなことをやってもらいました。また、小論文の添削についても助けてもらいました。

さらに、1200人の1年生の1番から1200番まで、点数をつけて順位を出しましたので、その点数入力等もやってもらいました。

この件では、先生もTAも相当疲弊しましたけれども、このことによって、1番から1200番まで、順位をつけることが無駄か、あるいは効果があるかということを検証することもできたと思います。

また、本学に昨年、IR室が出来ましたので、センターではそこと協力して、点数を入力して、学生の力の伸張具合を測るということをやっています。たとえば、国語のプレースメントテストと同じように英語や数学のプレースメントテストを入学後にやっていますので、国語の力と、英語や数学とどのように連動するか。また、卒業時に、どのくらい成績が伸びて、それが就職とどのように関係するかということも、今後、IR室に蓄積されたデータをもとに分析できると考えております。

次のスライド【スライド13-17】は、それぞれの先生の小論文課題に関して、第1回目と第4回目の得点の推移なのですが、どこをとっても一定の伸びは見受けられました。それは学生のコメントシートにも現れています。学生も、文章の書き方まとめ方が判って良かったと、そういうふうに学生も言ってくれております。

ところで、先程、学内報告会とFDおよびワークショップを実施したと申しましたが、この科目については、当初から「履修免除」ということを謳っておりました【スライド18】。つまり一定の能力をもった学生については履修免除を行うということを約束しておりましたので、それをどういうふうにするかということがひとつの大きな課題でした。

履修免除ということになると、それを測る尺度が大きな問題となります。そこは、

私どもも色々考えました。たとえば、文章に関する検定も色々なところが開発しております。そういうことをやっている業者さんに来ていただいたり、あるいは文章検定を取り入れている大学の事例をうかがったりもしました。それで、この外部の文章検定に類するものを学生に受けさせて、それによってこの「学びの基礎技法B」の履修免除を行うということも考えたわけです。しかし、この方法には良い点と悪い点があります。良い点としては、検定が客観的な判断材料になるということ。悪い点に関しては、お金が掛かるということや、本学独自の国語教育の内容との整合性です。

私たちが一番考えたのは、結局、外部の試験や検定を受けさせるということになると、この授業自体が、外部の検定試験向けの科目になってしまうのではないかという懸念があったことです。つまり、「本学でどういう学生を育てたいのか」ということを置き去りにして、外部の文章検定で高得点を得るために、それに合わせた授業になって行ってしまわないだろうか、ということ。そういうことを考えますと、やはり、本学で一定の基準を定めて、その結果として履修免除を出そうということになりました。

センターで打ち出したこの方針を、研修会やFDを通じて本学の先生方にお諮りしたところ、先生方からも同意をいただきました。そこで、私たちが履修免除のラインを決めて、履修免除者を出しました。その際には、点数をどこで切るかという問題や、どういう指標を使って線引きするかということで、相当議論を致しました。

結果としては、740人を履修免除するこ

ととなりましたが、全体が1250人くらいですから、そのうちの740人の履修免除というのは相当な人数です。これはどこから生まれたかということ、グレード別クラス編成の中で、上級クラス・中級クラスの上位に入る学生達、そのあたりの学生の能力を基準にすると、740人くらいの履修免除者が出来るということがわかったのです。同時に、下位クラスの学生には相当問題があるので、この学生たちが2年次に進んだ際には、この下位クラスの学生に注力し、これを対象として徹底的に教えるのが、むしろ望ましいのではないかというふうに考えました。

この履修免除をした学生については、先程申し上げた教養教育の他の科目を自由に取ってもよい、そちらの単位を積極的に取るようにと指導いたしました。

なお、その履修免除者について、更に学びたいという学生に対しては、別途「アドバンスクラス」を用意することにいたしました。つまり、「学びの基礎技法B」の授業とは違った国語力を更に涵養するメニューを用意することにしたのです。たとえば話すことに特化したメニューとか、調査した報告やレポートをまとめる方法などです。文章に関する興味が湧くように、文章理解の幅を広げた授業をアドバンスクラスとして2年次に用意しようと思っております。

次のスライド【スライド19】は、11月にやったディスカッションのテーマです。実は、ここには隠されたテーマがありまして、私たちは、この話し合いの中で、専門科目の先生方とどのように連携できるか、ということ聞き出したかったわけです。

初年次教育の中の国語教育を何故やるかと言いますと、これを専門教育にうまく接続できるように、あるいは、専門教育の中で、国語の力を発揮した思考力や文章力を展開してもらいたいがためにやっているわけです。ですから、ディスカッションを通じて、専門領域の先生方から色々ご意見を聞くことが出来ればと思ったのです。しかし、結論から申しますと、なかなかそういうふうにうまく話は進まなかったというのが実情です。と言いますのも、例えば「私たちの学科・学部では、基礎ゼミの中で同じようなことをやっています」とか、あるいは「私たちには私たちのやり方があるから」という発言がありました。

その一方で、私たちの取り組みを、非常に好意的に受け取っていただいて、「普段の教育活動の中で、文章を添削したりする時間がなかなか取れない。それを1年生2年生の段階でやっていただくのはありがたい」というご意見もいただきました。要するに、この「学びの基礎技法B」の授業を通じて国語教育をしっかりとってもらいたいというご意見を多くいただいたのです。

その結果、今年度の後期の授業では、引用や要約、それからマッピング（論構成）等を積極的に行いました【スライド20】。

こうした取り組みを1年間やってみて、今後の課題や問題点を考えてみました【スライド25】。

まず、専門教育への接続ということをもう一度考えなければいけない。それから、TAの方々をどのように育てて行くか、TAと連携して授業を運営して行くかということも、さらに考えなければいけないということ。

また、本科目についても、他の科目がそうであるように未修得者が出てしまいます。それをどのようにすくい上げて行くかということも課題です。本学では、前期授業と後期授業の間にある夏休みの後半に、「IP期間」を設けております。このIP期間を使って、集中的に再履修クラスを作ってやるということを今後やって行かなければならないと思っています。

そして、長期的な視点から、「学びの基礎技法B」学修効果を今後検証して行かなければならないとも思っております。

他にもまだまだ取り組まなければならないことがあるのですが、実は、教育開発推進センターを立ち上げて、力不足ながらセンター長をやっているつくづく思ったことがあります。それこそが、本日の私の結論かも知れませんが。

それというのは、こういう教養教育や初年次教育というのは、一部の先生方がやるのではなくて、結局は、大学全体の総力戦だろうということです。

国語の力を涵養することの意義を、教員の皆さんが認めてくださって手を貸して下さるなら、1年生の基礎ゼミナールや、上級学年の専門科目教育の中で、国語の力を涵養プログラムを加味することができるでしょう。

キャリア教育についても、仮にキャリア教育に特化した科目を作らなくとも、先生方の心の片隅にそういうものについての意識があれば、活動と教育との連携ができるのではないかというふうに思っています。

今後センターがやらなければいけないのは、全学的な取り組みとして、学生の学力を伸ばすにはどうすべきか、教育をどのよ

うに考えて行くかということを中心になって考えて行くことであり、そのFDを先生方に呼び掛けてやっけて行くような活動だと思っております。

大学の執行部の先生の中には、「教育開発推進センター」の前に冠を付けて、「全学」というのを付けなければならないとおっしゃる方もいらっしゃいます。教育開発というのは、全学的な取り組みでなければいけないし、教養教育というのは、1年生2年生に限ったものではないと思いますので、今後の課題として、それを4年間の中でどのようにして行くかということ、考えて行かなければならない。それが、ひいては学生を卒業させるにあたっての質保証になるのではないかなというふうに思います。

どのように学生を育てて行くか。まさに建学の精神ということについて、先程の松坂先生のお話からも宿題をいただきましたので、最後にそれに触れて終わりたいと思います。

大正大学が、小さな大学だったときには、建学の精神をメインに据えてやっけてまいりました。ところが、現在では建学の精神を初年次教育や教養教育の中に、どのように分かりやすく取り込んで行くのか考えていかねばなりません。その課題を、本日は頂戴したような気がいたしております。

平成28年度に90周年を迎える大正大学です。ので、伝統を考えながら、教養教育・初年次教育の充実を今後とも進めて行きたいと思っております。

どうもありがとうございました。(拍手)

② 学年全体の統一した成績付け

出席 (20% ※6回以上の欠席で単位不認定)

漢字テスト (30% 中間・期末テスト)

小論文 (50% 4回)

- ① 東京オリンピック開催に賛成か反対か
- ② 小学生のスマートフォン所持に賛成か反対か
- ③ 女性の社会進出を進めるためにはどうすればよいか
- ④ 早期英語教育に賛成か反対か

ト 9

③-1 ルーブリック

・小論文は、5人の教員の点数が概ね統一されるように、ルーブリックを採用

大項目

1. 文・表現・語彙(全14項目)
2. 表記・原稿用紙の使い方(全9項目)
3. 意見文(全5項目)

ト 10

③-2 ルーブリック

例: 基礎技能Ⅱ-1 第4回小論文チェックリスト

項目	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	
1. 文・表現・語彙																					
2. 表記・原稿用紙の使い方																					
3. 意見文																					

ト 11

④TA

TAの採用

- ・本学・他大学の大学生 (本学留学生11人、他大留学生3人、卒業・修了生4人)

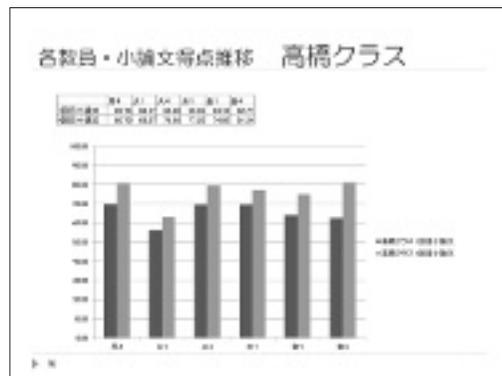
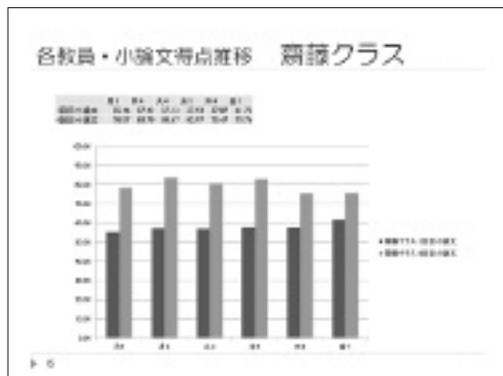
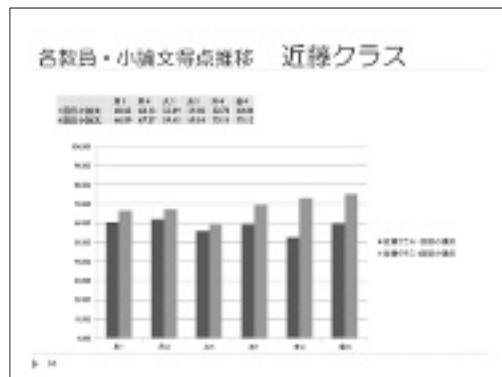
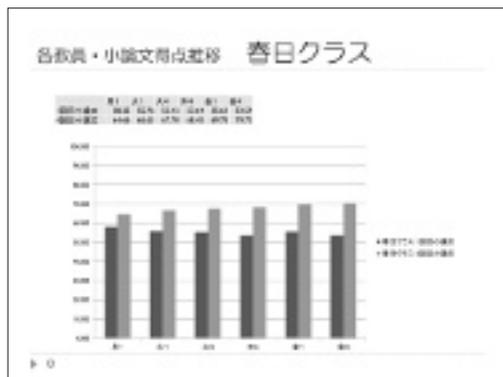
TA業務時間

- ・授業1コマ、作業1コマ、計3コマを1セット

TA作業

- ・授業補助
- ・小論文出題
- ・漢字テスト採点 等

ト 12



今後の課題と問題点

- ▶ 1. 専門教育への接続
- ▶ 2. TAの活用と連携
- ▶ 3. 単位未修得者のへの対応
- ▶ 4. 長期的な視点からの学修効果の測定

以上

トコ

25